

# 読売俳壇

## 矢島 渚男 選

朝六時猟師仲間は山に散り

和歌山市 針谷 国光

【評】朝六時に集合、そしてそれぞれの位置へ向かって出発する。誰一人遅刻する者はいない。規律を守れない者は狩猟には不適なのだろう。いまや狩りは地域にとって重要な役割になった。

再会の手袋啜へ脱ぐ握手

久喜市 深沢ふさ江

【評】懐かしい再会。ここで会えるとは思わなかった。歯で啜えて手袋を脱いで握手。中七が立派な描写である。

雪だるま傾けた首を直しやる

一関市 高橋紗千子

【評】急な大雪で子供たちが作った雪だるま。見ると首が少々傾いている。私が直してやりましょう。

東山角曲がるたび除夜の鐘

京都市 吉田 基子

帰り花手に産休のお父さん

生久市 中村 栄子

自販機が汁粉の季節迎へけり

相模原市 荒井 篤

教へ合ひほめ合ひ笑ひ日向ぼこ

別府市 本藤 宣子

余生なる域に逆らふちやんちゃんこ

千葉市 森田千代子

考へずめて無になれず日向ぼこ

熊谷市 間中 昭

残党の年忘れかな呑めねども

東大和市 板坂 寿一

## 高野ムツオ 選

戦争に戦争重ね年暮れる

高松市 島田 章平

【評】ウクライナ侵攻に加えガザ侵攻。世界各地で紛争が相次ぐなか迎えた年の瀬。平和な来年となるように祈りながら年越の準備にいそむ。

狐火や紐の葉の切れており

前橋市 山本 亨

【評】狐火と紐の葉には何の関係もないけれど、何だか怖い。切れた部分ほどこへ行ったの。まさか狐の尻尾だったわけではないよね。

山細り瘦せて冬眠儘ならぬ

國分寺市 野々村澄夫

【評】木の実がなくて、とにかくお腹が空く上に、温暖化とかで変に暖かい。どうにも冬眠できないと熊に成り代わって嘆いているのである。洗濯機ぐるぐるんと年暮れる

初雪や座敷にひびく花鉢

宇都宮市 津布久 勇

動くかに見えて動かぬ飾海老

松山市 三木須磨夫

応へなきものと語りて霜の夜

東大阪市 渡辺美智子

寒雷や短歌に帰らうと思ふ

茅ヶ崎市 清水 吞舟

この赤は何という赤寒椿

雲南市 熱田 俊月

風花や朝餉の白湯をよく噛んで

奈良県 米田 勉

佐野市 高橋すみ子

## 正木ゆう子 選

ごみ出しと犬の散歩の年暮るる

川越市 益子さとし

【評】一年を振り返って、他に何をしたら、という意味に取ったが失礼だろうか。しかし充分ではないか。普通のことだが普通に出来た一年。自分も家族も犬もみんな無事。雪の質足に聴かせる家路かな

さらさらか、水を含んでいる

青森市 前田 享静

【評】さらさらか、水を含んでいるか、根雪になるのか。踏みしめる足がよく知っている。だから足に聴かせる。作者の住所を見て、深く納得。補聴器を外せば聴ける冬籠り

そういものなのかと思う

西東京市 高科 謙称

【評】そういものなのかと思う。外すと、機械的な音を出す。それを「唸る」というと、小さな一個の生き物のようだ。肯く人が多そうなの。鉄棒を見るだに寒し子を葬る

獲物から羽噴き上ぐる鷹の狩り

東京都 天地わたる

冬帽に卵をもらふ生活して

旭市 斉藤 功

哀しみも寂しさもなし寒北斗

岩出市 沢田慎一郎

わたくしの哲学の道狸出づ

八王子市 梅沢 春雄

猫又になつてもいいぞ炬燵猫

相模原市 芝岡 友衛

七度目の辰や五臓に寒の水

東京都 中島 徒雁

多摩市 高野 伸二

## 小澤 實 選

ただネット張るだけ鹿除けの垣は

宝塚市 広田 祝世

【評】鹿除けの垣を端的に描いた。ネットを張る動作を見ているのも巧みである。猪除けなどになると、もっと頑丈につくらないといけないのかも知れない。

営業課の女子の四人組が、肉

志木市 谷村 康志

【評】営業課の女子の四人組が、肉鍋を囲んで忘年会をしている。酔うにつれて、課長の悪口も出るか。全部漢字で入り込めない感じも出た。闘汁や私の箸はかたきもの

闇の中で鍋を食べる遊び。私

唐津市 室井加代子

【評】闇の中で鍋を食べる遊び。私の箸がつかんだものは固い。食べられないものの可能性もありそうだ。まだまだ安心できそうにない。

鮎舟漁師とどめの鉦を打つ

深谷市 三上 通而

ワッシャーにボルトにナット寒に入る

青梅市 青柳 富也

店頭からすみ干して小料理屋

大阪府 池田 寿夫

生き長らへ我も埃ぞ冬銀河

羽曳野市 鎌田 武

底冷えをやるはりほくし京こぼ

東久留米市 福西 りん

ひしやげたる枯蟻の腸乾ぶ

鹿兒島市 鶴屋 洋子

十台のロボットもいて煤払

新潟市 古泉 浩子

暑すぎて白熊氷にも寄りず

宝塚市 広田 祝世

【評】「マフラーの長さは二人分だけど・関根ともみ」「新緑のしづくを集め五色沼・吉村恵子」「折られたむ如くに暮るる秋の空・高橋広子」「自転車は風の乗り物いわし雲・加田紗智」など多くの秀句に恵まれた中から広田さんを挙げる。猛暑の動物園を描き、俳諧のうちに悲哀をこめた面白い句である。

## 年間賞 俳句 ①

教室のみんな見ている秋の虹

総社市 風早 貞夫

【評】授業中であらうか、休み時間であらうか。窓辺のひとりが「虹だ」と声をあげる。教室のみんなが窓辺に目をやり、空を見上げる。先生のほうを見たり、机の上の教科書やノートを見たりしている生徒は一人もいない。虹はたちまち消える。ただの「秋の虹」なのだが、皆で澄み渡った青い空を見ている。

(宇多喜代子)



題字デザイン・イラスト 福田美蘭